

第二期 第四十号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.11.20 定有堂書店 発行

## 本の街

奈良 敏行

(定有堂 店主)

本の街

生態系を植えつける

ワクサカソウヘイ

沖繩園紀行 — 新テストつてなに？

芝野 浩貴

読書の秋の本の漫画の話

ムラカミヒロミ

シベリアに残されて

山本千津子

鳥取あれこれ その三十九

内田 克彦

木管の懸け橋、リユブリヤーナ、松江

秦阜 梅林

そとへでる日記

鳥居 貴彦

森の読み方

古賀 啓二

クッキー

あきの素生

湯たんぽのはなし

ドラメリア

…… 編集後記



十月半ばに三日ほど上京した。宿が、日販(取次)のお世話で共済会を通し、水道橋の東京ドームホテルだったので、一駅神保町へも足を伸ばした。三省堂と神保町ブックセンターの間を散策した。三省堂では、ついでにこの十月にネットを中心としたメディアが紙ものの書籍を二点刊行したので、その存在をうかがってみたかった。新刊コーナーをはじめ数か所に並べてあった。二点のうち片方が二倍くらい置いてあったので、そういう判断なのだと思ふことができた。全体に、人文書とビジネス書が溶解しはじめているようにも感じた。昨日までの本格的な人文書は上階の古書コーナーと並列してしまっていた。安定した指針のない時代、形而上学でなく、人の思考がより先鋭的に未来をつくるのだと思えた。

喫茶店での一休みに読もうと思ひ、鳥取を出るときから『方丈記私記』堀田善衛をポケットに入れていたのだ

が、一階の平台から『彼岸の図書館』夕書房を手にした。地域暮らし・本というテーマだった。

神保町ブックセンターでは暖かいコーヒーを注文した。とてもおいしかった。『方丈記私記』は、源平の交代期の動乱を背景にするものだが、堀田善衛は太平洋戦争の戦前戦後の災厄を重ね読みする。乱後に階層差が「平らかになる」予感が高まり、しかしあえなく消える刹那の刻だ。以前来たときは、柴田信さんの書店事務室（岩波ブックセンター）でコーヒーをいただいた。今日は少し離れて書棚のあったあたりのテーブルで、店内の軽い喧騒に耳をすましている。ここには風景を重ねる人もいるし、そうでない人もいる。

三日滞在の狭間の日は、上野公園の中の、古くからある和食の韻松亭で縁者六人の会食をした。上野の森は数十年ぶりで、樹木の丈が高くなっていて驚いた。まるで自分が縮んだかのように錯覚するものがあつた。

同じ月に旧友の飯澤文夫さんから便りがあつて、冊子『神保町が好きだ！』2019年第13号が同封してあつた。

明治大学史資料センター調査員で、永くこの本の街に尽力されている。以前は毎号柴田信さんが送ってくださっていたものだ。飯澤さんは出版社の「PR誌」研究の権威でもある。二十代の頃から地方史誌の評を雑誌に連載されていた記憶もある。視点を、かくれやすいもの

を守る方向にそそぐ人なのだ。「出版社・書店等PR誌一覧」も編集されている。ご本人は「PR誌のこと、たった一年調べただけで、専門家のように扱われる」（便り文）と謙遜されるが、『日本古書通信』（日本古書通信社）にも現在『続PR紙誌探索』を連載している。十月号（通巻1083号）で第七回。

資料を集められているとき、「出版社のPR誌、どんなのがあるの？」と聞かれ、その重大さがよくのみ込めず「PR誌おもしろいですか？」と返して叱られたことがある。わたしは本屋なのでそういう歴史資料意識に関して軽率な所があつて恥ずかしく思った。研究者の資料意識がリアリティへ向かうとすれば、本屋はいつも読者の半歩先のアクチュアリティを見つめる。PR誌の情報は早すぎて、ときに本屋の現場の判断を誤らせることがある。少し遅れる方がいいのかもしれない。

同じころ、神保町からは遠く地方に視点をうつして、「本屋が楽しい まちが楽しい」という特集の『地域人』第50号が刊行されて寄贈を受けた。本屋の存続が危ぶまれるこの頃、地方の疲弊と共にいっそう厳しい状況に本屋が置かれる。しかし、地方だからこそ輝くという、本屋の気概を求める特集だ。「楽しい」をテーマに全国横断するのだが、山陰は土地勘のある南陀綾繁さんが訪問されている。本屋をシヨップとしてだけでなく、人と

して語ることでできる人だ。定有堂も取り上げられている。「この店で出合う『小さな一冊の衝撃』にくらくら」と小見出しがついていた。

本屋の特集を読むのは苦手だ。それぞれの初発衝動がまぶしい。自分のできなかったこと、しなかったことを思い出す。十月は上野の森そして神保町にたたずみ、また、あかるい姿の地域の本屋特集を目にし、自分がすっかり縮み志向にあることに気がついた。しかし、思えば縮んだ姿が、もともと本屋の人間としての、おのれの原点でもあった。I am here.

2019. 10. 26

堀田義衛『方丈記私記』ちくま文庫 2019

青木真兵・海青子『彼岸の図書館』夕書房 2019

飯澤文夫『地方史文献年鑑2017(第21巻)』岩田書院 2018

# 生態系を植えつける

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

もう「笑い」はいいかな、なんて考えているこの頃だ。「笑い」を諦めたとか、「笑い」とは決別する、というような話ではない。

初めて単行本を世に出したのが二十五歳の時。だから文筆業を営み始めて今年で十年になるわけだが、その間私と「笑い」はずっと許嫁のような関係を結んできた。当たり前のように、そばにいる存在。自分で決めたわけではなく、宿命的に交わらなければならい間柄。こうして私の筆の先で生まれるテキストは、「お笑い」のジャンルに吸い込まれていった。コラムもコントも、ルポも小説も。

「笑い」というのはあくまで手段であって、目的にするものではない。そんなことに気がついたのが、三冊目の本を出した頃。「笑い」というのは、先鋭化こそできれども、深層化させることはそもそも不可能なツールで

あるのだ。先が鋭くなっていけば、最後は消失する。気づけば、世の中から「おもしろコラム」と呼ばれるものを書いている文筆業は私ひとりだけになっており、ヒヤックとしたことを覚えている。

ウケたくて、この仕事を始めた。だから「笑い」を最大目的にしている文体が自然発生していたわけなのだが、「笑い」を長く続けていると、そのうちに「笑い」そのものが保有している限界値がわかってくる。

「笑い」とは、客の反応がクリアに返ってくる仕掛けだから、ウケたかどうか、非常にわかりやすい。でも、それはつまり、安易な手段であるともいえる。だって、「ウケている」という状態は、別に人の笑い声だけを指すものではないはずだ。観客を泣かせた時も、読者に言葉にはならぬ感情の動きを与えた時も、それは「ウケた」ということになるのだから。「笑い」とはエモーショナルの範囲の中にあるただの一形態であって、全ではない。私はもっと、幅の広い情緒の中でウケたくて、この仕事を始めたのである。そしてたまたま最初に目についた道具が「笑い」だっただけだ。

最近、芸人と仕事をすることも多くなってきた。だが、私は多くの芸人が、「笑い」を手段ではなく目的に履き違えていると強く指摘し続けている。その誤認では客の感情や記憶を動かすことなど不可となり、水商売として

破綻する、と常々唱えている。もちろん、若手芸人たちにはポカンとされている。「笑い」だけを豊かにするという行為は、箱庭を眺めてニヤニヤしているのと同義である。

みんな、スナックに行ったらいい。そこにはエンターテイメントの本質がある。

私には幾人かの先輩筋がいる。そのひとり、とあるギャグマンガの御大にして、思春期からの私に多大な影響を与え続けてきた某先輩に、先日誘われ、ふたりで飲みに行く機会を得た。先輩は「笑い」について真摯に取り組んできた人物であるわけだが、私の拙い「笑いとはただの一手段である」論に強く賛同してくれた。やはり、同じことを考えていたようだった。「笑い」はあくまでパシリであり、師匠のように崇高するものではないのである。おい、「笑い」、ちょっとパン買ってこい、焼きそば。パンだぞ、的な。

先輩と酩酊しながら、多くを語り合った。「変態」から金を直接もらう方法や、それがいかに真つ当な態度のシステムであるか、自分を下げ続けることでしか得られない景色があること、履き違えることのダサさ、その他諸々。ギャグから始めたふたりだったが、「笑い」の話はほぼしなかった。

生態系を植えつけないかと思っっている。自分がつくった、

自分だけの生態系を、広く、どこまでも範囲を伸ばして、植えつけないかと思っっている。思想的でも政治的でもない、マイビオトープを私は作るために、今日も人と会い、取材をし、原稿を書いている。「笑い」をパシリに使いながら、シーンを描いている。箱庭をつくることには、まったく興味はない。そして箱庭をつくっている他者を目撃すると、反吐が出る思いを走らせる。頼むから、こつちへ来ないでほしいと、強く願う。幼さとは、害悪でしかない。

生態系をつくっている者同士は、アメーバのようにして、互いの生態系と生態系との接地面を探る。そしてたがいが、実際にリンクされていく。こうして新たな生態系は、デテイルが深化されていく。私は箱庭ではなく、生態系をつくっている人と多くの時間を持ちたいと願っている。

先輩もまた、生態系をつくっている人だ。終電間際、握手をして別れた。そしてその手を離れた瞬間、私のビオトープはまた少し、豊かなものになった。

小さなミジンコたちが形のない池の中で産声をあげ、私は渋谷駅から地下鉄に乗った。

# 沖繩菌紀行

く 新テストつてなに？ く

芝野 浩貴

(地球探検家)

歩いている時、自然を体で感じているか人に会いに行くと。座っている時、誰かと話しているか一人で文を考えている時。2018年12月に旭橋駅の前に新しい沖繩県立図書館が出来た。沖繩を初めて訪れたのは司書として全国図書館大会に参加した時だ。まだモノレールはなかった。旧図書館は沖繩建築様式で、公文書館同様赤瓦であったが新図書館は駅前開発の一環としてビルの中に入った。今年観た映画で一番印象に残るものとなるだろうフレデリック・ワイズマン監督の「ニューヨーク公立図書館」の冒頭はリチャード・ドーキンスが市民講座で話している映像だった。(綿密なる取材の元、図書館の存在意義を示してくれるいい映画なので是非ご覧ください。)新館になってからも何度か利用させてもらっているが居心地はよく、常にいろんな形のフリースペースや閲覧席、研究席で県民や観光客が学習している。政治や教育が腐

敗しても図書館が生き残ればなんとかなると私は思っている。(最近では「風をつかまえた少年」の映画のように)その図書館の隣の自治会館で行われた数学教員指導者講習会の講師の一人であった私は、数学とは直接関係のない話をする中で、定有堂と汽水空港とタルマーリにも触れた。

それに関して沖繩の二人の子供の事例を挙げたい。一人は飲食店を経営するママさんの小学校6年生の娘さんの話。頭の回転の速いお子さんで、インタナショナルスクールにいた時は児童会長もやり、リーダーとして級友から頼られていたが、転校して日本人に囲まれた途端にいじめにあい登校拒否ぎみになったと。毎日面白くなく、学校行きたくないと言いつけるので、そのママさんは自分で学校を立ち上げることにした。手始めとして塾を経営したいがノウハウがないので、音信不通38号にも登場した遊歴算家のさんに援助を顧われた。私もその付き添いで立ち会った。パラグアイやニースで英語講師を務めたことのある人をチーフに据え、スリランカの上座部仏教僧にもなった人(名前は須藤義人)で「神の島の死生学」など本も出されてます)などボランティア講師を揃え、募集半年で20名弱の塾生となり、娘さんも生き生きと学んでいた。その塾に行くと私も小学生から高校生までの幅

広い層に同時に何が話せるか四苦八苦しているが、国際色豊かな講師人からも学んでいる。

もう一人は不屈館のスタッフの一人の中3の息子さんの話。不屈館とは、沖縄を守るために闘った「不屈の人」瀬長亀次郎の資料館である。筑紫哲也はニュース23のキャスターの前は沖縄の特派員であった。瀬長亀次郎とも何度か会い、島から島への移動中などに直接取材していた。89、80、81などでさえ戦争を語り継ぐニュースが少なくなりつつある現在、筑紫哲也のもとで学んだ佐古キャスターがカメジローを掘り起こした。前作の『米軍が最も恐れた男 その名はカメジロー』（8月10日にDVD化されています）に続き、桜坂劇場で第2作の『カメジロー不屈の生涯』を観た足で若狭小（若桜ではない）近く的不屈館に移動した。展示資料見学中、スタッフの息子さんの宿題が気になり声をかけたら、お母さんが悩みを話してくださいました。茨城在住時に3.11で被災し、放射能から逃げて地震のない沖縄に移住したが、学校のクラスで放射能差別、県外者差別を受けて息子さんは引きこもるようになり、高校進学は沖縄でなくて県外希望になったと。偶然が続く。その息子さんの進学希望学校は島根県で私がよくお世話になる学校の近くであった。一方で、不屈館の館長の内村千尋さん（亀次郎の次女）は東京での

上映に際してのトークショーで不在だったが、その日東京の私の教え子のAさんがその上映会に参加していた。鳥取市出身である。

さて、冒頭の私の講演内容に戻る。タルマーリの渡辺格さんは「スタッフの関係が悪い時に麴が育たずに青カビが生える」と言われていた。「普通の本屋」からぶれない奈良さんや汽水空港で学び舎を実践する「汽水学港」の存在は、沖縄の嘉数で天然酵母パンを作る「宗像堂」の宗像誉支夫店主の言葉「酵母材料と対話し、あらゆるものを感じながら作る。たくさん菌が入ったほうが美味しいので、美味しいという目的のために共存できるように作る。酸素が好きな菌、嫌いな菌がいるが、お互いを尊重して、かみ合った時、創造的なパフォーマンスが生まれる。」と噛み合う。新テストの問題が気になり参加された先生方だが、私には生態系を無視したカリキュラムに賛成するわけにはならないのでそう話した。主体的・対話的・深い学びは大事な概念だが、それは生き物と対峙してこそ回り始める。

沖縄と山陰を繋ぎたいものである。

# 読書の秋の本の漫画の話

ムラカミヒロシ

(ライオン・ブックマン)

近年（と言っても三十年くらいだろう）、本屋あるいは本ネタの漫画が随分多くなつた。いくつか御紹介したい。

## 1 新刊書店

最も早い時期の作品は、知る限り**高河ゆん**「**ほっとす たっふ、88**」だと思ふ。作者は当時「同人界の女王」とまで呼ばれた人物で、洗練された絵柄と、ちよつとズレた日常感覚が持ち味の作家だった。今はなき神保町の書○ブ○ク○ー○トを舞台にしたバイト女子高生（実は…）のお話。

**久世番子**『**暴れん坊本屋さん**』と**本田**『**ガイコツ書店員 本田さん**』は、経験者が語る内幕暴露本。ヤバイネタは予め自主規制（検閲）されているとは言え、それでも相当ブラックな本。

客側の話としては、**清原なつ**の『**花岡ちゃんの夏休み**』が名作。一冊の本を奪い合うバトルは新鮮だった。もは

や古典だろう。

SFで、未来の活字本の在り方も考えさせる、**とり**・

**みき**『**DAI-HONYA**』もお奨めしたい。

## 2 古書店

**つげ義春**「**古本と少女**」は、貧乏臭い話だが、如何にも昔の古本屋と学生の関係をリアルに描いている。**諸星大二郎**『**葉と紙魚子**』はホラー・ファンタジー。主人公の家が少々変わった古本屋という設定。所々マニアらしいクスグリがあつて迂闊に読み飛ばせない。

**グレゴリ青山**『**ブンブン堂のグレちゃん**』大阪の加○京○堂でのアルバイト体験を描いた漫画エッセイ。リアルでおもしろい。しかし、この下手糞な絵はどうかならんもんかいな。

## 3 図書館

**高野文子**『**るきさん**』図書館ネタがポツポツ。いかにも日常的に利用している図書館という感じ。シンプルな絵なのにミヨーにリアルなのである。

**荻野タオ**『**夜明けの図書館**』も**ウミハル**『**図書館の主**』も、ちよつといい話的なものが多く、矢鱈感動を押し付けてくるのが、何か違うな、という感じ。

同じ違うなら、**D・キッサン**『**私立轟高校図書委員会**』



や**竹本泉**『あかねこの悪魔』の方が無責任に笑えていい。後者はファンタジーだが、エンデ以来か、図書館とファンタジーは親和性が高いようだ。ただ、ことマンガになると「もどき」「風」「つばい」作品が多過ぎてウンザリ。スウィフトの「書物戦争」や京伝の「御存商売物」みたいなのが読みたいねえ。

#### 4 出版社

**松田奈緒子**『重版出来!』ビッグなので、サラリーマン・ステップアップものというノリ。しっかり取材されていて読ませる。**村上もとか**『フィチン再見!』も読んでおきたい。

#### 5 印刷屋

**瀬野反人**『いぬにほん印刷製版部』四コマの業界もの。必ずしも本の印刷ばかりではないけれど、縁の下は大変なんだね。(「いぬにほん」という名前に笑った) **奈良裕己**『印刷ボーイズ』もあるが、絵がちよつと…。

#### 6 製本屋

**重松成美**『白い本の物語』ルリユールの世界に魅せられた少年の物語。このテーマは珍しい。**麻生みこと**『路地恋花』にも女性製本家が出てくるが、こちらは洒落

なカタカナ職業モノという感じ。

#### 7 ブックガイド

**吉野朔実**『お父さんは時代小説が大好き』は、「本の雑誌」に連載されていた名物漫画エッセイ。作者のボケとこだわりが楽しい。シリーズで八冊出たが、作者の急逝で終了。現在、一冊本にまとまっている。

**芳崎せいむ**『金魚屋古書店』は漫画専門の古本屋ものだが、内容は各話で取り上げられる漫画の紹介と言つてよからう。同じ作者の『鞆図書館』は、ファンタジーの衣装を纏ったブックガイドもの。人生哲学に絡めたがるのは作者の性分だろうか。

**玉川重機**『草子ブックガイド』こちらも人生いかに生きべきかの読書案内。きわめてオーソドックスだが、生真面目過ぎて息苦しい。**cococo**『今日の早川さん』などの方が、どマニアックながら、気楽に読める。趣味の合わない人には不気味なだけだろうか。

## シベリアに残されて



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

よくもこれだけ、と次々と驚き、怒りを通り越してあ  
されるばかりのニュースが続く中、「厚生省の派遣団が  
持ち帰ったシベリア抑留者の遺骨のうち五九七人分は日  
本人のものではない疑い」との報道で思い出したことが  
ある。

一九九〇年代にロシア沿海地方ウラジオストクに住ん  
でいた時、厚生省からの派遣団とは別に、個人で父親の  
遺骨を求めて訪ロされていたMさんと知り合った縁で、  
お手伝いさせてもらうことがあった。それまでは元抑留  
者でソ連国籍の方が通訳として関わっていらしたが、体  
調を崩された後に私が引き継いだ。と言っても空いてい  
る時間にできる範囲でのことなので高がしれている。八  
月の滞在中にも私は週末しか現地には行けなかった。

日本人抑留者遺骨収集団や慰霊碑への墓参団の受け入  
れを担っていたロシア人女性には、厚生省からの仕事に加  
えて、個人的にも依頼を受けておられた。第五五五労働  
大隊に属していたことがわかれば、彼女の手元にある軍  
の調査資料には埋葬地が地図とともに記されているので、  
見当がつきそうな気もするが、手書きであやふやなとこ  
ろがあったり、近くに五五三や五五八大隊もあるので混  
同されているかもしれないし、資料を信じて探しに行っ  
た先は半世紀を経て木々の生い茂るうっそうとした林の  
中だ。唯一の手掛かりは鉄道の引き込み線、支線に分か  
れたところから南西の方角に二〇〇メートルと書かれて  
いても、その一か所をどう探すのか？ 長年の経験から直  
感で、ここは違うとわかるそうだ。では南東の方角に歩  
いてみると、何となくそんな感じもするが、掘ってみた  
ところ堅穴の住居跡だったらしい。

数年に渡って探し続けられた。八月に来られるMさん  
のために冬の間は資料を何度も読んで現地の状況と照ら  
し合わせる作業、現地の人々からの聞き取り、随時ファッ  
クスで報告。夏までに何度か現地に足を運んで試掘する。  
Mさんが到着するや、資料を囲んで関わっている人たち  
がお互いに意見を言う。前年の経験を踏まえて確信はな  
いけれど、このあたりかと。そして今年もまた……………

最終的に一九九六年の夏、Mさんはお母様と弟さんを連れて現地に入り、あらかじめ許可された場所に日本語でお父様の名前の刻まれたプレート状の墓石をセメントの中に埋め込み（建てるのと壊されるか盗まれる可能性があるとの理由から）、横にロシア語表記の現地地図が彫られた石を置き、お墓ができた。その日、林の中に二列の土盛りを見つけた。白樺に囲まれたそこだけがすっぽりと抜け落ちているような場所だ。明らかにこれまでとは違う感じで、皆がここだと決めた。でももう掘る必要はない。写真を置き、ろうそくを灯し、日本からの供物を白い布の上に並べてくれたのはロシア人だ。

Mさんの目的は確かにお父様の埋葬地を探し出すことだったが、ロシア人の協力なしにはできないので、自ずとロシア人との親密な交流ができていった。ウラジオストクからでこぼこ道を車で半日かけていった先の村で、抑留者について耳にしたことを話してくれる人たち、夏休み中の幼稚園を宿泊用に開放してくれた園長さん、試験をしてくれた人たち、村長さんも協力的だった。途中で車が故障するハプニングや脳炎ダニや蚊などに襲われる、水が出ないこともしばしば、目的以外のことに時間を取られることの多いロシアである。不満や苛立ちの感

情があらわになることもあったが、いつの間にかMさんは遺骨よりも村の人や幼稚園児たちのことを思うようになっていかれた。

Mさんのように自分で資金を作り、実際に行動を起こせる人は少ない。その分、同じ境遇にある他の人たちの思いも背負って、毎回、沿海地方のいくつかの別の村へも足を運ばれ、墓碑の前で手を合わせてこられた。

報道では一九九九年から二〇一四年に収集されたものに日本人でない可能性があるとのこと。私が帰国したのには二〇〇〇年の初め。何十年にもわたって厚生省と仕事をしてきた彼女は、その後、全く今までの仕事とは関係のないところで働くことになった。彼女なくしては遺骨収集事業は不可能であろうに。それともDNA鑑定に任せればいいか。

それにしても彼女の情熱は一体どこから来ていたのだろうか、なぜあれほどまでに親身になって自らを捧げることができたのか。今、彼女と同年齢になった自分にはいつそう信じられない。ゴム長靴で林の中を縦横に進んでいく彼女の後姿が目につかぶ。

# 鳥取あれこれ その三十九

内田克彦

(地域研究家)

佐々木惣一と古井喜実と矢部貞治、この三人の共通事項は二つある。三人とも鳥取中学を卒業していることと、三人とも戦後直後に帝国憲法改正案を作成していることである。国立国会図書館ホームページ「日本の誕生」「資料と解説」を開くと、この三人の憲法改正案が掲載されており、原本自体と活字化したものの両方を見ることが出来る。

佐々木については、一九四五年一〇月四日近衛文麿がマッカーサーからの指示を受けて、内大臣府において憲法改正作業を行うこととし、内大臣府御用掛に任命された近衛が京都帝国大学出身であったことから、近衛から依頼されて作業を開始し、一月二四日には佐々木案を昭和天皇に提出したことは、日本国憲法制定史上よく知られている。

矢部が作成した憲法改正案で、現在残されているのは、

外務省にあった全文タイプ打ちの「憲法改正法案(中間報告) 矢部教授案 昭和二〇、一〇、三」である。これが、近衛が指示されるより前の、『矢部貞治日記』の一〇月二日付に記述のある、外務省に提出した「憲法改正試案」であろう。『矢部貞治日記』によって、当時内務次官であった古井喜実と内閣副書記官長であった高木惣吉から依頼されたことがわかる。このホームページに掲載されるより以前に、江藤淳編『占領史録3 憲法制定経過』に掲載されているが、それには「昭和二〇、一〇、五」とあり、数字を読み誤って収録している。

河西秀哉著『「象徴天皇」の戦後史』では、「敗戦直後

の九月の時点で、内閣の中樞部において、すでに憲法改正の必要性が考えられていた事実は注目すべきだろう。」とし、さらに、内閣書記官局、木戸内大臣、外務省に(『矢部貞治日記』によれば、あるいは近衛にも―筆者補注)伝わった矢部の案は「その後の憲法改正作業に影響力を持ったと推測される。」としている。また、原秀成著『日本国憲法制定の系譜Ⅲ―戦後日本で』では、「矢部の『憲法研究会』で立案を助けた佐藤功が政府での立案に加わり、旧友の入江俊郎も矢部と意見を交換していた。それゆえこの時点で、日本政府の基本的な「態度」が形成されてしまった。」としている。

古井の場合は、余り知られていないが、内閣に置かれた、松本丞治国務大臣が委員長である憲法問題調査委員会に「囑託」として、一九四五年二月二日の第五回総会時から加わっており、それ以降、調査会と称する小委員会にもほとんど出席している。古井が作成した憲法改正案で、現在残されているのは、憲法問題調査委員会に提出した、カーボン複写のタイプ印書の「憲法改正綱領(未完稿) 古井囑託」である。西修著『証言でつづる日本国憲法の成立経緯』(古井へのインタビュー実施日は、一九八五年八月一六日)の中で、古井は「〔内務次官に就任した〕当時、やがて憲法改正が不可避の課題になると考え、プライベートな研究会をつくりました。メンバーとして、外務次官の松本俊一さん、中学時代からの同期で東京帝国大学教授において政治学を担当していた矢部貞治君、のちに憲法学者として大成する佐藤功氏や若手の外務官僚が集まってくれました。おおいに議論して、それなりの案を作成しました。そのときの案は、いまでも残っているはずですよ。」と述べているが、『矢部貞治日記』において矢部が研究会を精力的に開催し研究会案をまとめていることが読み取れるものの、古井がこの研究会を主導しているようには見られない。古井は、矢部をはじめいろいろな人達と意見交換の中で自分の案を

まとめていったのだろうか。

なお、ホームページに載せられている古井案は「昭和20年12月22日提出」と記載されているが、原文には日付が打たれていない。『日本国憲法制定資料全集(1) 憲法問題調査委員会関係資料等』に載る「憲法問題調査委員会第五回総会配布書類目録」には、古井案が掲載されておらず、「資料の解題」には、「本資料は、第五回総

会から参加した古井囑託が提出したものであるが、その期日・経緯は不明であり、便宜上ここに掲げておく(佐藤・成立史第一巻三一八頁注(1)では、佐藤の手書きで、一月一二日の記述があるという。)」と書かれている。因みに、佐藤達夫著『日本国憲法成立史第一巻』を見ると、「古井案には、一月一二日を示す佐藤の手書がある。」と記されている。

従って、二月二日に提出されたものではなく、「宮沢、古井、入江、佐藤ノ四人」で「大改正、小改正ノ二ツノ場合ノタメニ案ヲ」作ることになったときに初めて古井案を提出したのではないかと考えられる。

(以下、続く)

二〇一九、一〇、二九

## 木管の懸け橋、リュブリヤーナ〜松江〜

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

プラバホール於て（初めて）スロウインド木管五重奏団  
松江公演ヲ聴ひた、九月五日（木）の事。  
パイプオルガンを背に重厚な佇ひ。欧州の教会堂を想は  
せるまろやかな音の響き。深く沈み込む座席、個人的に  
は少し苦手だけれど。

中欧の古都リュブリヤーナから名門スロヴェニアフィ  
ルの名手達による、良く練られ燻し銀のやう、味はひ深  
ひアンサンブル。

美しい響きの「場」を得て、熱心な聴き手にひたすら  
楽の内面と向き合はせる実力派。

プログラムより。モーツァルトのアダージョアレグロ  
へ短調 *Andante* では、少し前に書かれた「ドン・ジョヴァ  
ンニ」で主人公ラハデスの奥底へと誘った暗ひパトスが  
現はれ、D: スカルラッティ「D: リパティ編2つのソナタ  
(*Mos15ing, 427ing*)」此方は対照的に明るく軽やかな木  
管の響きで透明な楽興が駆け回った。選曲にも唸らさ  
れたけれど其の編曲の冴へは、稀代の「スカルラッティ  
アーナ」として名声を馳せた名ピアニスト、リパティの  
優雅な芸風が偲ばれる見事なもの！管楽に貴重な素晴ら  
しひレパートワールを齎した。

同郷のN: シェンク (1982)「シルエットと影」、12  
音の絶対音楽に此以上の発展を望まなひ筆者だが、「シ  
ルエットとシャドウは違ふの？」お化けの出て来さうな  
表現、微妙なルバート奏法を多用し三人の奏者が交替で  
他者を指揮する、何となくどことなくユーモラスな表現、  
陰湿で閉じられ無機的な前衛と違ひ、他の分野、特に映  
像表現と組み合わせで何か新しひ可能性が生まれやしな  
ひか？

ツェムリンスキー「フロレスケ（ロンド）」変ロ長調  
(1939) 此はささやかな「薔薇の騎士」だ、爽やかな詩  
情とノスタルジー、セピア色の淡ひ色彩が夢の中交錯す  
る。

「リゲティ」「6つのバガテル」ブリュネゲルにも通じる東欧の農村の田園風景を彷彿とさせる牧歌。初期リゲティは「ポスト・バルトーク」とよく云はれるが、此の作品では寧ろヤナチェクに繋がる表現主義×国民楽派の延長線上を自在に往く胸のすく独歩ではある。

P. ヒンデミット 5つの管楽の為の小室内楽 Op. 24/2 (1922) オリジナル定番の傑作。ヒンデミットの即物主義が無機質で空虚な其れでは無く、クールで、或る時はシニカルに、亦或る時は大層人間的なお喋りや動作のふんだんに聴かれる、曲本来の「性格的小品」としての悦び溢れる名演に成って初めて、作者の目指した新古典主義的な機会音楽は聴く者の心にストレートに訴へるのだと痛感した。

このやうな豊かな「時」を、山陰の、とりわけ若ひ人に「生涯に航る感動の礎となり得る、生の迫力ある舞台をもっと多くの人に！」と思ったのは、鳥取から駆けつけた僕だけだったらうか？ 果たして。

2019. 10. 01

「今回の一枚」

P. ヒンデミット チェロ協奏曲

P. トルトリエモ、チエコフィルハーモニー  
指揮マアンチエル (Rec. 1955)



(画 A・T)

# そとへ出る日記

鳥居 貴彦

（開風社 待賢ブックセン

ター）

休日。息子と墓参りに行くことにする。急な石段を手すりにゆっくりゆっくり登る一歳児。自分の背より高い手すりにつかまって一心にさきをめざす。そのさきにはなにがあるんですか。ライターを忘れたので線香に火がつけられなかった。

奈良へ、岡山へ。本のおまつり。

奈良ではクルマを駐車場に入れてからのことを全く考えていなかった。あれ、この箱ここからどうやって運ぶんや。そういうとき砂川さんはちゃんとしている。しかるべきところにぼーっと立って的確なことを言う。ありがとうございます。並べ終わる前からお客さんがやって

きた。

本のおまつりには、本を買う人がやってくる。そんな当たり前のことにクラクラする。本が売れないって誰が言ってるんやろう。こんなに真剣に本選んでる人がいて、一日中本に囲まれて遊んでる人たちがいる。

岡山では直原さんと三宅さんがあいかわらず漫才をしながら本を売っていた。売るのが楽しいよね。おまつりやもんね。笑っていると本が売れる。

九月は二日にいっぺんジュンク堂にいた。またきたんですか、とスタッフの人の顔に書いてある。どうもすいません。本が売れてできた隙間を見るのがたのしくて。え、今日ごんだけしか空いてへん……と不安になるときはだいたい店長がさきに補充してくれてる日。売れた本のタイトルを眺める。どんな傾向で、客層はこうで、価格帯はこのへん、みたいなこと、全然わかりません。ただ、開店前から本屋に並ぶ人が毎日いて、いつも誰かが本棚を真剣に見つめてる。そのことに安心する。一ヶ月で三回きてたあなた、こっそり顔覚えましたよ。

城陽まで買取りに行くことになった。朝10時20分。中村さんはマンションの下でタバコを吸っていた。20分前に送ったメールには「10分遅れます！」と書いてある。



待ち合わせは10時。こういうときはとにかくあやまるしかない。「高速でいこか」と冷静な指示。アクセルを踏む。「ちようど間に合いそうやな」とインターチェンジを降りたところで中村さんがつぶやいた。時間を守る。そういうとこ大事やぞ。

家に着くと中村さんは素早かった。どンドン本を抜いていく。ガンガン中身を確認し、棚に戻す本は丁寧に戻していく。うろうろすることしかできない。突然「鳥居くんいるやつあつたら抜き」と声がかかる。えーっと、と言ってる間に次の束がどさつと手渡される。えーっと。「おとうさんもなあ、なんかゆうといてくれたらよかつたのに」と依頼主のおばあちゃんがうしろでつぶやいている。「これおとうちゃんに買ってもらったんや」と息子さんが凶鑑を見つけ出した。ベッドの周りまで埋め尽くされた本と額縁。かつてここに暮らしていた人の気配。いつのまにか岡田さんが一緒になって本の束をさわっていた。ここを紹介してくれた古道具屋さん。満州の雑誌かあ、とかいってたのしそう。おばあちゃんが引き揚げの思い出を話し始めた。あつというまに本の束が玄關に積み上がる。まだ午前中。空が青い。足を毛虫が歩いている。でかいツボが岡田さんのハイエースにおさまった。「ちよつとこんなはさんどいたら意外と安定するねんで」と自慢げに笑う。

配達にいく。知人の仕事場。唐突に吹き抜けがあつたりする。たのしい配達。だが配達に行く間はお店を閉めなければいけない。ドアに貼り紙をする。「16時にはもどります」。ミクチさんがやってきた。あ、いまじかんありますか。え、10分くらい？ あーもうちよつと…：いとももらえませんか？ え？ まあいいすつよ。台所にお茶とかあるんで。自転車にまたがる。

ちよつといくと交差点に見たことのある後ろ姿。あ、と思うがちよつと声をかけるのに時間がかかったのは、僕が知ってるその人は広島の本屋さんだったから。なんでここに？ 佐藤さんがこちらをふりかえってからも、町の背景と人物があつてない。生まれ育った町に大学の友人を連れて来たときみたい。自分の中の時空がゆがんでいる。え、あなたここにいていいの？

バス停で佐藤さんを見送る。よー笑う人やなあ。もう30分くらいたっている。あれ、おかしいな。配達先へはあと5分。

16時をすぎてミクチさんから電話がかかってきた。結局一時間も店番してもらっている。「フランスから来た方が平凡社ライブラリーの星の王子様を買って行ききましたよ」とたのしそう。よかつた。ありがとう。

数年前に祖母が骨折した。数日前まではピンピンしていたのに病院に一晚閉じこもっていただけで家族の顔がわからなくなり、ここは私の家じゃないと暴れたらしい。祖母に見えていた病室の景色、なんとなくわかる。緊張。息ができないその感じ。そのときの話をしても「そんなことあったかなあ」と言う。この人はいま、好き放題に呼吸をしているな。

外に出る、というのはなんかそんなことなんだと思う。利益とか商売とかそんなんじゃないやなくて、健康とか身体とか、そんな類の。外に出ると、いいことがある。外に出ると、元気になる。しらんけど。

## 森の読み方

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

一遍読んだ本を読み直す、などという貧乏臭いことは、宵越しの銭を持たねえのと同じくらいに有り得ねえ、と江戸っ子の私(嘘ですが)は忌避してきたのだが、これが試してみると物凄い。初読から覚えていた印象、世間の評判に毒された上澄みというかが篩に掛けると消え失せて、残る珠玉の様な実質を自分はどうやって読み損ねて来たのか。

と、この数ヶ月は本を買うこともなく(懐具合が寂しい、ということもありますが)、本棚から洋の東西を問わず、既読の長編小説を引っ張り出して、真つさらな知的体験の如き興奮を楽しんでいる。

老人性痴呆の賜物ね、安上がりで良かったね、などと

口さがない家人の様な者は捨て置き、表層的理解の欺瞞を喝破する、積み重ねられた叡智を有するに至った自分は、老いもそう悪いものではない、などと北叟笑むのである。

家内の動物好きが昂じ、近年の休暇は主にジャンゲル系で（昨年はマダガスカル）、今年はマレーシア領ボルネオ島に二週間滞在した。

今回の旅には『マザリング・サンデー』（グレアム・スウィフト）、『百年の孤独』（ガルシア・マルケス）、小説ではないが『日本の詩歌』（大岡信）を持参。全て既読である。長い休暇に一度読んだ本ばかり持つて行くのはこれが初めてかもしれない。

長旅に携える本の選択は人生に於ける難問のひとつだが、老人性痴呆は、もとい、蓄積された叡智はその難度を緩和する。

再読の新鮮さの主因が恐らく初老性痴呆に依拠するものである、という事実を糊塗するわけではないが、読み直しに至るには、「語り手の視点」、というのを名作と謂れる先達の仕事から学びたい、という殊勝な理由も少なからずあった。

漫然と読むと筋ばかり追ってしまうが、今読んでいる

部分は誰の視点で、その語り手に相応しい語り口で語られているか、といったベンチマークの様なものを設けるだけで、より深いところに分け入ることができる、ということが今更ながら分かった。

Fauna & Flora（動物相と植物相）というが、ボルネオの Fauna を司る Flora は熱帯雨林である。この Fauna は、広くボルネオの精神と言い換えても差支えない、と旅も終盤に近づいた頃、確信に至った。いや、Fauna を司る、というより、ボルネオは森なのだ。

オランウータンや、天狗猿、ピグミー象といった Fauna の姿を追い求めて各地の様々な森を徘徊するうちに、蒸せ返る様な緑、みどりに身を浸していると、近視や、乱視や、老眼や、発光する画面を凝視する眼精疲労やらでポンコツになった眼から、だんだんと霞が晴れてくる。

案内に雇った土地の人の英語力は限られていて、こちらの英語も本物ではなく、そもそも何語であつてもひとの話をキチンと理解するのが下手で、聞き取れなかった言葉を問い直したりすることも面倒でできないから十全なコミュニケーションなど成立するはずがないのだが、彼等は樹々の合間に見え隠れする獣を目視する能力には長けていて、“Long tail macaque!”などと囁かれては指差す方向に目を向ける、というのに左程深い相互理

解は必要とされない。最もアフリカの平原でほら、あそこ象、といわれるのとは異なり、慣れないと、そもそもジャングルにブレンドして身を隠そうとしている、脇の間に膜を生やしたり、胴を薄く平らにして樹々の合間を滑空できる様に適応というのか進化というのかをした栗鼠や蛇を、指される向きに見定め、目で追う、というのは極めて難しい。これは文明人（差別語か）間でも能力差がある様で、家内などは直ぐに慣れて、あ、ほんとだっている、などと喜んでいるが、私は遂に順応できず、見えるでしよ、などと確認されると悔しいのでウンウンと嘘をついてお茶を濁していた。

そんな風だから、動物を見つけた際以外に、案内人と世間話をする、などあり得ず、時々独り言の様に何か呟いていて、始めのうちは気にも留めなかったのだが、耳を傾けてみると、獣のことより樹や森のことばかり話している。

ボルネオのジャングルにはとてつもなく背の高い種の樹が多く、しゅーと幹が数十メートル真っ直ぐに伸び、その先端に葉叢が申し訳程度にある、というケースが多いのだが、一般論としては熱帯雨林に棲息する獣は天敵を避け、この樹上で生活している。オランウータンは何故か毎日異なる樹の上に巣をこさえ、寝るのだが、この

枯れた巣が樹上に散在（することを教えてもらい）し、あれはオランウータンの巣だな（これは動かないので見つけるのは割と簡単）、と云うといや、あれはただ落ちた葉が堆積し、枯れただけだ、と云う。当方の目には見分けがつかない。大猿の巣は枝ごと引きちぎられているところが、ただの枯葉の積み重なりと異なる、と云う。その区別が私にもつくようになり、得意げにこの相違を指摘する度に、優越的だが優しい笑顔を向けてくれ、私の承認欲求は満たされるのであった。

真っ直ぐに伸びる背の高い樹の中でも一際群を抜くのが *Mengaris* という、肌のすべすべした白い樹で百メートルに達するものもある。通称 *Beam tree*。滑らかな幹が熊などの登攀を拒むので、巨大な蜜蜂の巣をよく見かける。ここから採れる蜂蜜は特に甘露であるらしい（採れれば）。これも識別しやすいので、見つける度にガイドの注意を引き、” *Beehive on the beam tree!* ” と嬉々として指差す私に尻尾があれば激しく振っていたに相違ない。

この聳え立つ様な樹々には、*Buttress* と呼ばれる、底部に大きな板状の翼の様な根を持つものが多く見られる。辞書で引くと建築用語で「控え壁」。異なる樹なのに同じ様な構造が発生するのも、雨林に於ける適応なのだろうか。樹としては非常識な高さなので支えが必要なの

のは分かる。樹の太さによも依るが、通常四つか五つくらい、遙かに私の背を凌駕する翼状の根を持ち、その翼間が洞となっていて、森で迷った際はこの上に切った葉を被せ、夜露を凌ぐのだそうだ。そして喉が乾けばリアナという蔦を切って樹液を飲めばいいのだが、気をつけないと、毒性のものもあり、ある部族は吹矢に塗って獲物を麻痺させる。でもこの洞は森の幽霊も好むので自分には寝ない、らしい。

以下の会話は、森を彷徨しながら半日かかって、やっとなんとか理解できたのだが、昨年末から今年の春にかけて雨林全体の樹木が一斉に開花したとのこと。十年に一度あるかないかの事象らしい。そんなことがあるのだろうか。嘘かもしれないし、私の聞き取り間違いかもしれないが、家内も同様に理解していた。本当であれば、そこに居合わせなかったのが実に惜しい。

これが種だ、と枯れた羽子板の羽根の様なものを拾い上げて見せてくれる。こういう風に落ちてくるのだ、と中空に放り投げるとクルクルと回りながら落下する。しかしどの種子がどの樹のものか、尋ねても悉く同じに見えて区別がつかない。「異なる樹なのに」、と前述したが、この天を突く樹々は皆親戚なのかもしれない。そうであれば、近くに若い樹が育ち始めたら（天空に拡がる葉叢に陽を遮られ、発芽の機会を得ること自体が稀なの

だ）、次世代を庇護するために自分は地から養分を吸うことを止め、枝葉は枯れ落ち、若樹の養分となる。最後は幹全体が菌に侵食され、崩れ落ちるのだが、その際はすでに中は空洞で脆弱なので、周囲の樹木を傷めることはない、という擬人化された眉唾の説明も俄かに信憑性を増す。

森も本と同じで（字も似てる）、漫然と眺めていると景色に過ぎないが、そこには文法や文脈、もしくはプロットの様なものがあり、然すればボルネオは森なのだ、と云うとき、そこを彷徨う際の「巻を措く能わず」といった感興に領ける。

夜は疲れ切っていて、ということもあつたが、日々森の書かれ方の理解が深まるに連れ、その目目にした森の様子を読み返すうちに夢と見境がつかなくなる、ということの繰り返しで、携行した本で読んだのは、片道四十時間近い移動の途中に読み返したイギリスの小説一冊だけであつたが、実はこの作品はメタ小説なのか、小説の書かれ方についての小説と読むことができ、非常に興味深かつただけで、これについてはまた改めて書く。

# クッキー

あきの素生

(くうねるめがね)



最近、クッキーづいている。

日頃から食べているけれど、今回は、デパートなどで売られている、よそゆきのやつだ。ひとつは、行列に並んでもらった。もうひとつは、消費税が上がる前に、とものを買ったら付いてきた。自分では買わないよそゆきのクッキー、やっぱり格別においしい。

子どもの頃、ごくたまに、わが家にもよそゆきのクッキーがやってきた。缶かん(かんかんつて、漢字でどう書くのが正解なんだろう)入りのクッキー。なぜ、どこからやってきたのかは、子どもにはわからなかったけれども、ある日突然、きれいな模様の、まん丸だったり楕円形だったりする缶かんが、居間のテーブルに置かれる。その中には、いろいろな形のクッキーが、絶妙な配置で並んでいる。プラスチックケースに、そのまま(個包装せずに)入れてあって、上に緩衝材(プチプチ)がかぶ

せてあるものが多かった気がする。お気に入りには、薄いクッキーが長細く巻いてあって、中が空洞になっているもの。って、固有名詞でなく言葉で表現するの難しいなと思つたら、シガレットクッキーとか、シガレットラングドシャという名前があるのですね。あとは、プレーンとココアで市松模様になっているアイスボックスクッキー。子どもながらに、ばくばく食べず、二、三枚ずつ嗜んで食べた。クッキーをすべて食べ終えたあとは、プチプチをつぶして楽しんだ。

いまやすっかりお菓子作りからは遠のいてるが、クッキーをよく焼いていた時期がある。小学生の頃だ。特にハマっていたときは、毎週のように焼いた。最初は型抜きクッキー。星やハート、桜、なみなみの丸など、オーソドックスなステンレスの型。人形や馬などの形の、少しポップな赤いプラスチックの型。薄く伸ばした、卵色のなめらかな生地を、いろんな型で抜いていく。隙間をなるべく空けないように、でも、あんまりくっつけようとしすぎると、端っこが欠けてしまうから、慎重に。型を抜けるスペースがなくなったら、その切れ端たちを丸めて、また薄く伸ばす。最後は手で、残った生地を自分の好きな形に整えて、ほかのクッキー(生地)と一緒に油を塗った天板にのせ、オーブンで焼く。焼き上がる頃

には、部屋に甘い匂いとあたたかい空気が漂う。

自分でクッキーを作れることがうれしくて何度も焼いた、のだとも思うけれど、それよりも、仕上がりに納得できていなかったのではないかと思う。私の焼いた型抜きクッキーはいつも、焼き立てはまあまあ、でも、冷めてくると堅パンか、というくらい堅くなった。小学生のこと、オーブンを買ったときに付いていたらしいレシピ本を基に、砂糖やバターのを勝手に減らしたりして、自分なりの工夫と想っていた。工夫好きの子どもだった。お菓子のレシピに素人の工夫は厳禁、とは、大人になるまで知らなかった。今度はおいしく焼けるんじゃないかという根拠のない期待があつて、せっせと堅いクッキーを焼いた。ちなみに、堅パンは好きだ。ただ、これはクッキーだと思いがら食べるので、その堅さがせつなかった。

焼いても焼いても私の型抜きクッキーは堅い、と思いきり、次に絞り出しクッキーに挑戦した。こちらは冷めても柔らかかったが、焼き立てが「生焼け？」と疑いたくなるほどのしっとり感だった。さくさくしたクッキーを作るのは、かくも難しいか、と嘆息した。

は、ドーナツにまつわるエッセイや物語、レシピばかりを集めた本だ。手作りの型抜きドーナツのエピソードの中に、リング型の真ん中の生地をまとめてまた伸ばし、型抜きを繰り返して、最後に残った生地を丸め、まん丸いドーナツをひとつ作るというおはなしがあった。まん丸ドーナツは、「ドーナツの穴」と名付けられていたそう。型抜きクッキーの最後に捨てる1枚のことを考えていて思い出した。「ドーナツの穴」に匹敵するような名前は思いつかないけれど、自由に作れるあの一枚は、特別。きつと工夫を凝らしていたに違いない。



『なんたつてドーナツ』（早川茉莉編、筑摩書房、2014）

（イラストあきの素生）

# 湯たんぽのはなし



ドラメリア  
(座敷わらし)

朝夕が冷えるようになってきたので、湯たんぽを導入した。わたしではない、猫たちの話。毛皮を着ているので暖かそうに思うが、猫たちは案外寒がりだ。特に年上の方の猫はもう高齢で活動量も少なくなってきたので冷えるのか、よくデスクトップの筐体載っているデスクに飛び乗って、びったり身を寄せている。……精密機器に動物の毛はよろしくないのに、本当はやめて欲しいところだが。

一昨日から使い始めた湯たんぽにも、刺身のネタのようにきつちり上から納まって鎮座していて、ちよつとやそつと触れたぐらいでは動こうとしない。なるほど、では膝の上に湯たんぽを乗せれば、わたしの膝からずつと動かずにくれるのだろうか。これでおさわりし放題ではないか！ そう思っただけで自分の膝にまず湯たんぽを乗せて、その上から猫をオンしてみたが、残念ながら不安定で落ち着かないらしく、このアイデアはすぐに消えた。

このとおり、導入以降湯たんぽさんの人気に嫉妬を禁じ得ない日々だが、暖をとることに関しては、わたし自身はあまり不自由していない。何しろ、天然湯たんぽが二つもあるのだから。カバーは要らず、お湯を替える手間もない、温度は一定に保たれて火傷の心配もない。もさもさと毛が生えていてやわらかい。しつこく密着しすぎると少し嫌そうに身じろぎし、うにやあと鳴く。何か気に入らないうちとときどき爪を立てる。油断がならない、かわいい湯たんぽ。



## ・編集後記・

先日の夜、若桜街道に面したビルの1階に不思議な空間ができてました。建物がクラシックなので、なんだか幻想的な雰囲気。後で聞くと「銀河鉄道祭」の関係だったようです。ドラメリア(編集長)

月はじめ定有堂の正面は歩行者天国。「木のまつり」苗木プレゼントなどで、すごい人出。川端通りではフリーマーケット。紙屋さんが紙の端切れを販売。綺麗なのでたくさん購入して文庫カバーをつくりました。

奈良敏行(発行人)